

生徒の自尊感情を育むカリキュラムマネジメントの研究

－ “よさっぴタイム” を中心とした学校教育活動を通して－

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践応用領域 学校づくり履修モデル

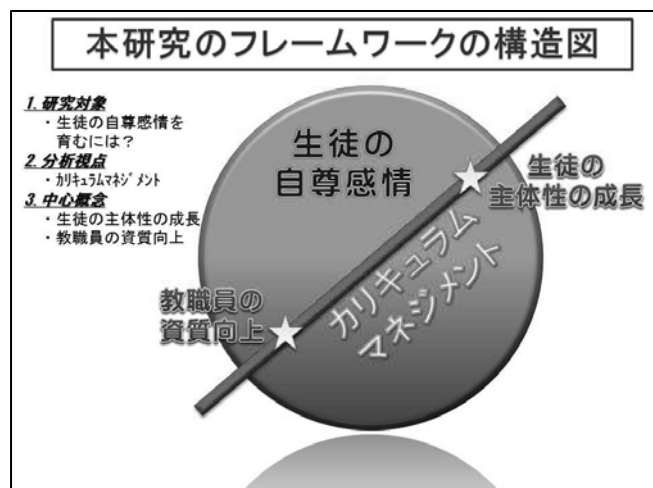
岡田 篤三

1 研究の目的

本研究は、「生徒の自尊感情を育む学校教育活動」を、「カリキュラムマネジメント」という教育方法学の視点で整理し、効果的な学校改善を目指すことである。

そのために、“よさっぴタイム”という学校独自のカリキュラムを開発し、実践をする。“よさっぴタイム”とは、SST(ソーシャル・スキル・トレーニング)と、SGE(構成的グループ・エンカウンター)の手法を統合したものである。そして、“よさっぴタイム”で身につけた力が発揮できる場面を、学校生活の中で意図的・計画的・組織的に設定し、学校教育活動を展開する。さらに、この実践が、生徒の主体性の成長や教職員の資質向上にどのように影響を与えたかについて、質的(ディスコース分析法等)・量的(アンケート調査・分析等)に実証した研究である。

ここで、本研究のフレームワークの構造図(資料1)を下図のようにする。この構造図は、「各焦点を①研究対象(りんご)②分析視点(ナイフ)③Key/中心概念(虫眼鏡)に例えて、その研究対象を分析視点で切り込んだ一断面から、いかなる概念(可能であればSomething New)が浮かび上がるか」¹(倉本ら, 2014)の考えに基づいて作成した。



資料1 本研究のフレームワークの構造図

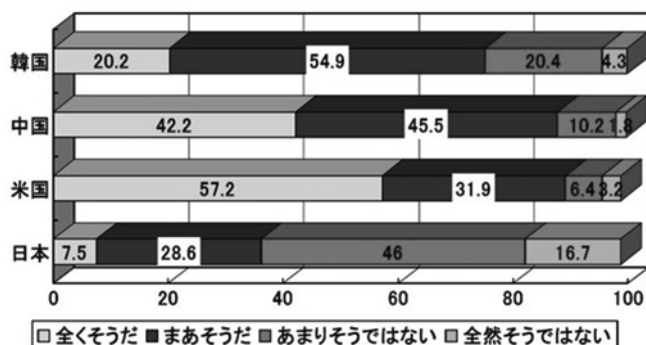
2 研究の意義

(1) 自尊感情に関する研究の視点

情報化、核家族化、少子化等の社会変化にともない、子供たちを取り巻く環境の中で、人間関係の希薄化が様々な課題を生んでいる。特に、生命を尊重する態度の乏しさ、基本的な生活習慣の未確立、規範意識や人間関係を形成する力の低下など、子供の心の活力が弱ってきていると言われている。

内閣府の『低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書』²(内閣府, 2007)においては、「平成11年9月の同じ調査との比較で、“自分に自信がある”と答えた小学生は56.4%から47.4%に、中学生は41.1%から29.0%に低下している」との報告がある。また、「高校生の心と体の健康に関する調査」(資料2)の中で、「私は価値のある人間だと思う」という設問に対して、「全くそうだ」「まあそうだ」と答えた割合が、米国89.1%、中国87.7%、韓国75.1%に対し、日本は36.1%と、とても低く評価している。グローバル化が進むこれからの社会で活躍する日本人を育成するために、自分のよさに自信をもって行動できるよう、自尊感情や自己肯定感を高めていく教育を推進していくことが課題であると考えられる。

私は価値のある人間だと思う



(出典)「高校生の心と体の健康に関する調査(2011年3月)」
財団法人 一ツ橋文芸教育振興協会、財団法人 日本青少年研究所

資料2 高校生の心と体の健康に関する調査

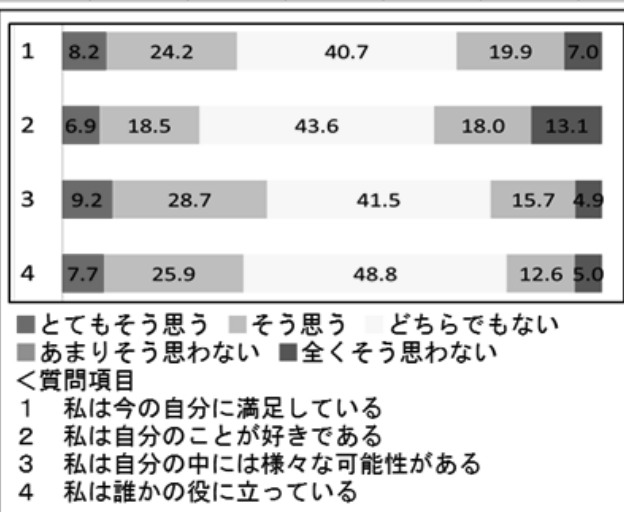
(2) カリキュラムマネジメントに関する研究の視点

今、学校における教育活動や教員の指導の在り方の変革が求められている。これについて、『学習指導要領 解説 (小学校・中学校:総合的な学習の時間)』³ (文部科学省, 2008) の第4章の中で、「計画, 実施, 評価, 改善というカリキュラム・マネジメントのサイクルを着実にを行うことが重要である。」と述べられている。このように、**教育課程行政においてカリキュラムマネジメントの必要性は強く認識されているが、現段階では、カリキュラムマネジメントを意識した実践が各学校で活発に行われているとはいえない状況**である。

また倉本は、「これまでの国内研究は、一定の教育課題に特化したカリキュラムの方法・内容論や、その学習者である生徒への教育的効果、及び学校と学校外組織との『協働性』に関するカリキュラムマネジメント論の領域までは、十分な理論的整理が行き届いているとは言いがたく、そこに必然的な理論的限界点を持っている。」⁴ (倉本, 2008) と述べ、**カリキュラムマネジメントにおける生徒への教育的効果を実証している事例は少ないと指摘**している。

(3) 本校の現状に関する視点

本校の生徒の特徴としては、素直で純朴な生徒が多く、与えられた課題の解決には、意欲的に取り組むことができる生徒が多い。しかし、平成26度4月に全校生徒を対象としたアンケート調査によると、「**自分のことが好きである**」という設問に対して、



資料3 本校生徒のアンケート調査結果

でもそう思う」「そう思う」と答えた割合が、**25.4%**と**とても低く評価**している。(資料3)この調査から、本校の生徒は、自分に満足できていないだけではなく、自らを誇ることも、自分を価値ある人間であると思うことも低い実態が明らかになった。そのためか、どこか自分に自信がもてないところがあり、授業や学校生活において声量が不十分な生徒が目立つ。

そして、情報機器の発達により、メール等で仲間と簡単にコミュニケーションをとることができるようになったものの、それらが原因で仲間とのトラブルを引き起こしたりする問題が生じている。さらに、人間関係づくりが苦手な集団の中に入れなかったり、話し合いの場になると関わりをもった発言ができなかったりする生徒もいる。

また、**主題研究のねらいや具体的な方策が全職員に共通理解できておらず**，“よさっぴタイムを教科に取り入れるという定義がはっきりしていない”や，“よさっぴタイムと教科の学習内容と、どう関係づけるのか難しい”という意見がある。

(4) 本研究に関する視点

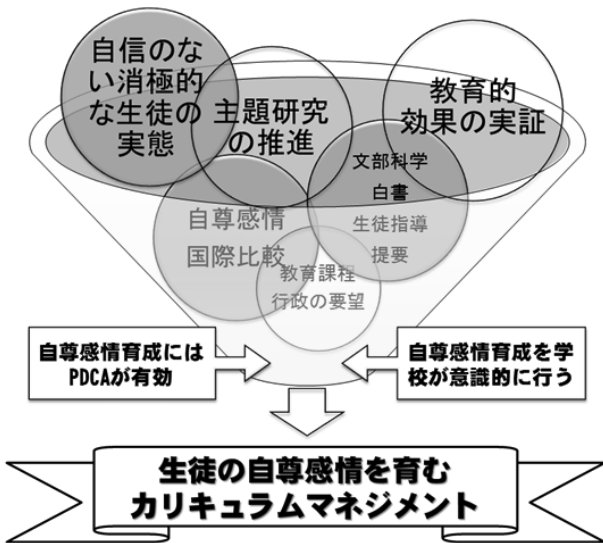
現在を生きる子どもたちの問題として、曾山は、「かかわりの量的不足・質的变化が、ほどよい自尊感情や適切なソーシャルスキルを育む機会を奪っている」⁵ (曾山, 2014) と述べ、小林は、「**社会性を育むプログラムの最低限必要なものがカリキュラム化されないと、本当は意味がない**」⁶ (小林, 2005) と述べている。また、栃木県総合教育センターは、平成23・24年度の調査研究において、**自尊感情を育むためにPDCAサイクルを意識した指導が有効**であるとしている。

これらのことから、本研究の意義を次のようにまとめる。

- ① 本校生徒の実態調査から、生徒が自分のよさに自信をもって行動できるよう、自尊感情や自己肯定感を高めていく教育を推進していく必要がある。
- ② 教育課程行政においてカリキュラムマネジメントの必要性は強く認識されているが、現段階では実践例は少なく、その教育的効果を実証している事例は限られている。

③ 子どもの社会性を育むことを、学校が意識的に
行わなければならない現状において、自尊感情
を育むためには、PDCAサイクルを意識した
指導が有効である。

このことから、よさっぴタイムを中心とした学校
カリキュラムを開発し、そのカリキュラムがどの
ような改善効果を持ち、生徒の主体性の成長や教
職員の資質向上にどのように影響をもたらすのか
実証する必要がある。(資料4)



資料4 研究の意義の概念図

3 自尊感情に関する理論研究

(1) 自尊感情に関する理論考察

ローゼンバーグ (Rosenberg, 1965) は自尊感情について、二つの異なる意味について述べている。一つは自分を「とてもよい (very good)」と考えるもの、もう一つは自分を「これでよい (good enough)」と考えるものである。「とてもよい (very good)」という考えでは、完全性や優越性を含む感覚であり、他者との比較関係を基にした「優劣」を基準に置いている考え方であると説明している。そして「very good」な自尊感情は、他者との比較の中で自分を肯定的にとらえようとする感情である。そこでは優越性という感覚と切り離すことができず、形成される力は「〇〇と比較して自分は優れている」という、他者や社会的な基準を強く意識したものとなる。そして肯定的な評価を受けられないと、自分の優越性を感じることができないために、ますます他者や社

会的な基準から自分を評価してしまうようになると論じている。それに対して「これでよい (good enough)」という考えは、自分なりの満足を感じる感覚であり、自分の中の価値基準をベースとして自分を受容する考え方であり、そこには他者と自分との比較による優劣という意識は含まれてこないとまとめている。

また、伊藤⁷ (伊藤, 2014) は、学校現場で求められる自尊感情には、以下のような要素が重要であると考えている。

○<自分という個>に閉じるのではなく、学校や社会に拓かれているという点である。自分だけを尊重する自己中心的なあり方でなく、自分と同じように人のことも大事にし、社会との繋がりを大切にできるというあり方が必要であろう。

○意識面に閉じられるのではなく、学校や地域社会においても思いやり行動や自己決定という具体的な行動面に結びついて現れることが大切であろう。

これらの文献から、自尊感情は、自分のかけがえのなさという価値を認識し、長所と短所を含めて受容したうえで、自分を好きだとする感情として、「自分をかけがえのない存在として認め、自分自身を好きだと思う気持ち」= “自己肯定感” と捉えることができる。

また、自尊感情が他者との関係性によって培われていく側面が大きいということから、他者や集団との関わりに着目し、その中で育まれる“自己有用感”を実感させることが、自尊感情を育むために必要であると考えた。

そして、自己有用感について北島は、「自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるかということをも自分自身で認識すること」⁸ (北島, 1999) と示している。また滝は、自己有用感を「他者との関係の中で自分の存在を価値あるものと受け止められる感覚」⁹ (滝, 1999) と定義している。そして、国立教育政策研究所生徒指導センターは、自己有用感とは、「他者の存在を前提として自分の存在価値を感じることで、誰かの役に立てたという成就感や誰かから必要とされているという満足感のこ

と」¹⁰ (国立教育政策研究所生徒指導センター, 2004) であると述べている。

以上のことから、本研究では**自尊感情を、“自己肯定感”と“自己有用感”の2つ**ととらえ、それぞれを次のように定義した。

●「自己肯定感」

自分の長所や短所を含めた自分自身の存在を、
価値あるものとして評価し信頼する感情

●「自己有用感」

他者との関わりを通して、自分が周りの人の役に
立っていることを実感し、自分を支えてく
れている人を大切にしていこうとする気持ち

(2) 自尊感情と生徒の主体性の関連に関する理論考察

デニス・ローレンスによると「**高い自尊感情を身につけている子ども**は、社会的な場面や学校で学業に取り組む際に自信を持ちやすいといえます。子どもは**学習に対して自然な好奇心を抱き続ける**でしょうし、新しい取り組みが示されたときには、それを**意欲的に熱心にしよう**とします。」¹¹ (ローレンス, 2008) とし、自尊感情を高めることによって、主体的に取り組むことができると述べている。

また、平成 22 年に、慶應義塾大学教職課程センターの伊藤は、発達心理学や社会心理学等の観点から、自尊感情に関する調査研究及び考察を行った。そして、「一般的に自尊感情が高い人は、①自分をより肯定し、成功体験を強く認識する、②ストレスや危機に強い、③『健全』『適応』『成長』におけるプラスの要素が良好である、④過去をよりポジティブに捉え、未来に希望がもてる、などの様子が見られる。**自尊感情・自己肯定感の高さは、健全な成長や適応、生きていくための心の基盤であるとも言え、それは学力にも関係してくると言える。**」¹² (伊藤, 2010) と述べている。これらの先行研究の結果から、**自尊感情や自己肯定感を育むことは、生徒の主体性の成長につながる**といえる。

(3) 自尊感情を育むための手立てに関する理論考察

本研究の目的は、生徒の自尊感情を育む学校教育活動の中心となる“よさっぴタイム”という学校独

自のカリキュラムを開発・実践し、その効果を実証するものである。“よさっぴタイム”とは、SST (ソーシャル・スキル・トレーニング) と、SGE (構成的グループ・エンカウンター) の手法を統合したものである。そこで、SST と、SGE の手法や理論について簡単にまとめる。

① SST (ソーシャル・スキル・トレーニング)

ポープ (Pope, A. W.) は「他者から認められるには良好な人間関係が必要であり、そのためには他人とうまく付き合っていけるような対人技能、すなわちコミュニケーションスキルを獲得する必要がある」¹³ (ポープら, 1992) と述べている。つまり、**自尊感情や自己肯定感の向上を図るには、コミュニケーションスキルを身に付けさせることや向上させることが肝要**であると捉えることができる。これらのことから、自尊感情を育むためには、人間関係を築く上で、人と積極的、建設的に関わり合うためのマナーやルールを身に付けることが必要であり、そのための体験活動やスキルトレーニングの機会となる SST の技法が有効であると言える。小林は、「**ソーシャルスキルとは『人間関係に関する知識と具体的な技術やコツ』を言い、人は経験を通して人づきあいのコツを覚えていくのである。**」¹⁴ (小林ら, 2007) と述べている。

② SGE (構成的グループ・エンカウンター)

SGE について、明里は、「本音と本音のふれあいによる自他発見を通して、参加者の行動変容を目標とする『集中的なグループ活動』のことである。究極的には人間的成長をめざしている。」¹⁵ (明里, 2007) とまとめている。また、曾山は、「**枠を与えられたグループサイズ (人数) の中で、枠を与えられた時間を使い、枠を与えられたエクササイズ (課題) を体験する。その後、各自の体験をシェア (分かち合う) し、メンバー間にリレーション (ふれあい) をつくり、リレーションを介して、自己発見、他者発見、更に人生発見を促進する教育的色彩の強い援助技法。**」¹⁶ (曾山, 2014) とまとめている。

4 カリキュラムマネジメントに関する理論研究

(1) カリキュラムマネジメントの定義

日本における「カリキュラムマネジメント」の理

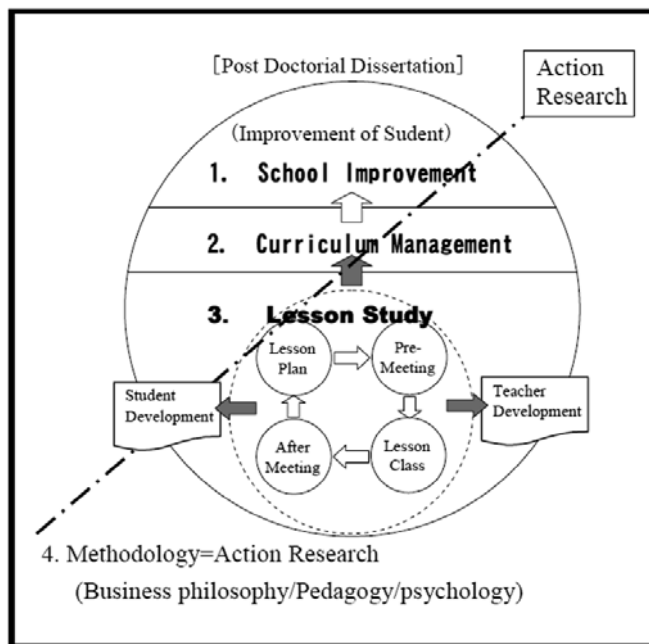
論は、1970年の「学校経営化の方法」において、「教育課程経営」という名で高野桂一が体系化したものである。高野によれば、「教育課程経営」という用語は、かつて「教育課程管理」や「教育課程行政」と言われた領域や事柄らに関連して使われ出した新しい専門用語であり、「管理」を「経営」と言い換えた点に新しさがあるという。また、高野は、これまでの教育課程論が教育内容論だけを偏重してそれが教育課程論のすべてかのように錯覚していた状況を克服する必要性から、学校の「教育課程経営」を「広義には、単に教育課程の内容をどうするか（教育課程内容論）、ということだけでなく、教育課程内容の計画＝編成（P）→その実施＝展開（D）→評価（S）を進めていく過程でなされる、さまざまな組織・運営上の条件づくり（条件整備）を意味している」¹⁷（高野、1989）と定義づけている。

また中留（1993）は、カリキュラムマネジメントとは「各学校が教育目標達成のために、児童・生徒の発達に即した教育内容を諸条件とのかかわりにおいて捉え直し、これを組織化し、動態化することによって一定の教育効果を生み出す経営活動である」¹⁸（中留・田村、2004）と規定した。そして田村（2004）の説明によると、「学校文化は、高野らの教育課程経営論が展開している人間関係論とは異なり、人間関係に限定せず、『学校成員のものの見方・考え方』といった、より広範囲の価値・認識形態・行動様式を含む概念である」¹⁹（田村、2004）と述べている。

一方倉本（2008）は、アメリカのカリキュラムマネジメントの先行研究において、イングリッシュ（F. English）の理論を例に挙げ、組織システム条件整備とカリキュラムの内容・方法論の相互作用としてその構成要素をまとめ、カリキュラムマネジメント論を整理している。そして、カリキュラムマネジメントを「教育目標達成のための教育内容・方法上の指導系列（Curriculum & Instruction）としての教育活動と、それをサポートする条件整備としての組織経営活動（Management）との二系列において、その目標に対応した成果を生成するカリキュラムPDC A過程という動態的概念が、カリキュラムマネジメントであり、カリキュラムの開発・経営論を中核に

据えれば、学校組織システムの改善過程とに有効性をもち、生徒の教育効果を上げることが可能となる。」²⁰（倉本、2008）と定義している。

さらに、インプット・アウトプット理論の見地から、カリキュラムマネジメントの効果は、教育のプロとしての教師、生徒の双方に極めて重要であることを示唆している。また倉本（2014）は、カリキュラムマネジメントにおいて、授業研究（Lesson study）は重要な構成要素であると考え、「**授業研究は、日本の教育文化が生んだ最も注目すべき偉業である。**研究授業の目的は、効果的に教育の質を向上させることで、教師たちはその実践研究を通して新しい何かを学ぶことができる。」²¹（倉本ら、2014）と授業研究について論じている。さらに、授業研究とカリキュラムマネジメントの概念上の関係性を図（資料5）のようにまとめた。²²（倉本ら、2014）



資料5 カリキュラムマネジメントの概念図

5 “よさっぴタイム”の実践

(1) “よさっぴタイム”の定義

本研究では、自尊感情を“自己肯定感”と“自己有用感”の2つと定義した。自己肯定感と自己有用感は、いずれも人との関わりを通して育まれる。しかし、現在の社会に生きる子どもたちは、関わり量の不足・質的变化の影響のため、他者と関わる技術を習得する機会が少ない。そして、他者と関わる技術が乏しいので、自尊感情を高めることができない

い状況にある。

そこで、“円滑な対人関係を築き、維持するために必要な知識、技能”を身につけるソーシャル・スキル・トレーニング（以下SST）と、“各自のエクササイズ（課題）の体験をシェア（分かち合う）し、メンバー間にリレーション（ふれあい）をつくり、リレーションを介して、自己発見、他者発見、更に人生発見の促進”を目的とした構成的グループ・エンカウンター（以下SGE）を統合した“よさっぴタイム”の開発に着手した。よさっぴタイムとは、

SGEの要素を取り入れたエクササイズに、SSTの手法を用いて取り組むことで、話の仕方、聴き方等の“ルール”を学級内に定着させ、そこから生まれた安心感をベースに教師と生徒、生徒同士の関わりが促され、“ふれあい”を構築していくもの。

と定義できる。

つまり、用意されたエクササイズに関わり合う技術を学びながら取り組むことで、自分を見つめ直し、自尊感情を高める足がかりとすることをねらいとしている。このよさっぴタイムを継続して行うことで、生徒同士の関わり合う体験が積み重ねられ、他者に向けて心が開かれるようになって考えた。（資料6）



資料6 よさっぴタイムの様子

(2) “よさっぴタイム”の実施

基本的に、毎週月曜日の5時間目の前に10分間で行う。取り組むエクササイズの内容は、生徒の実態に合わせて、意図的・計画的に行う。

始めに、よさっぴタイムのルールを確認し、黒板に掲示する。次に、実施するエクササイズの内容を伝え、教師と代表生徒で示範した後に、生徒同士の活動に取り組ませる。よさっぴタイムでは、4人グループをベースにグルーピングしている。このとき、

話しやすい雰囲気が生まれやすいよう、座席の配置も工夫をする。実践中に教師は、活動が停滞しているグループを支援したり、ルールを遵守して楽しそうに活動しているグループを全体に紹介したりして、温かい学級の雰囲気作りに努める。さらに、同じエクササイズでも構成メンバーを変えたり、内容をアレンジしたりして、飽きのこない工夫をする。そして、各回の終末には必ず教師の評価を伝えた後、ふりかえりシートを書かせる。また、1ヶ月に1回、月末のよさっぴタイムは、30分の拡大版で行い、1ヶ月間の振り返りも実施する。

(3) “よさっぴタイム”の年間計画

実施月	回	内 容
4月	①	・よさっぴタイムのねらいと ルールの徹底 ・ネームゲーム
	②	・並び替えのトレーニング ・ネームゲーム(難易度を上げて行う)
5月	③	・二者択一 ・質問じゃんけん
6月	④	・アドジャン ・いいとこ四面鏡
	⑤	・ゴリラとゴジラ ・アドジャン

(4) “よさっぴタイム”のワークシート

質問じゃんけんシート

名前 _____

質問	メモ
No.1 好きな季節はいつですか？	
No.2 趣味や好きなことは何ですか？	

(5) “よさっぴタイム”の成果

- ・うなずいて先生や友達の話の聴けるようになった。
- ・今までの自分を振り返ることができ、自分のよさとか新しい一面を知ることができた。
- ・毎回内容やメンバーも違うので、たくさんの考え方を聞いたり、いろいろな人と関わることができたりして、友達との仲がよくなった。

6 “よさっぴタイム”を中心としたカリキュラム開発と実践

(1) 学校カリキュラムの概念構造

本研究では、本研究では、自尊感情を“自己肯定

感”と“自己有用感”の2つと捉え、目指す生徒像を次のように定義する。

<目指す生徒像>

他者と関わり合いながら、自尊感情（自己肯定感・自己有用感）を高めることによって、「自分のよさ」「自分の存在」「自分の可能性」を実感し、よりよい自己実現を目指して主体的に学ぶことができる生徒

そして、目指す生徒像にせまるべく、学校の教育活動全体を通して自尊感情を高める4つの観点を、①自己受容・自己評価、②関係の中の自己、③自己主張・自己決定、④規範意識、と決める。そして学校カリキュラムの概念構造図は次の通りである。（資料7）



資料7 学校カリキュラムの概念構造図

よさっぴタイムで身につけた力を“授業“，“生徒指導“，“行事“，“学級経営“，“給食・清掃“，“部活動“などの学校教育活動の中で発揮することで，“自己受容・自己評価“，“関係の中の自己“，“自己主張・自己決定“，“規範意識“を高め、生徒の自己肯定感・自己有用感を高める。そして、自分のよさ、自分の存在、自分の可能性を実感し、よりよい自己実現を目指し主体的に取り組む生徒を育成する。

(2) 各部会のPDCAサイクルの実施

まず始めに、これまでの教育活動について自尊感情を高める4つの観点に基づいて見直し、概念化シートでまとめる。（資料8）

自尊感情（自己肯定感・自己有用感）を高めるための手だて<生徒指導部会>

<p>自己評価・自己受容</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教室で行いたいこと <ul style="list-style-type: none"> ・朝の黒板メッセージ ・朝の表情をよく見る ・背面黒板の目標 ・掲示 ○様々な場面でやりたいこと <ul style="list-style-type: none"> ・みんなの前でほめる ○協力体制 <ul style="list-style-type: none"> ・スクールカウンセラー ・心の相談員 	<p>関係の中での自己</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教室で行いたいこと <ul style="list-style-type: none"> ・使った物を片付ける ・（トイレのスリッパの整理等） ○様々な場面でやりたいこと <ul style="list-style-type: none"> ・礼儀マナーの確認 ・言葉遣いを意識 ・叱った後のフォロー ・笑顔で会話 ○指導種類 <ul style="list-style-type: none"> ・グループ指導 ・笑顔立ち番 ・協力体制 ・家庭、PTA、警察との連携 → 防犯
<p>自己主張・自己決定</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教室で行いたいこと <ul style="list-style-type: none"> ・朝の会で「級長からの一言」「1分間スピーチ」 ・静かに読書をする ・生活ノートの日記 ○指導種類 <ul style="list-style-type: none"> ・個別指導（面談等も） ・一斉指導 	<p>規範意識</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教室で行いたいこと <ul style="list-style-type: none"> ・時間を守る（タイム着席） ・空き教室の整理 ○様々な場面でやりたいこと <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ ・身なりを整える（パリ身だ） ・笑動 ・自転車のルールやマナー

資料8 生徒指導部会の概念化シート

主題全体会を定期的に行い、各部会でこれまでの成果と今後の改善策を検討し、まとめる。（資料9・10）

資料9 各部会の改善策のまとめ（1学期末）



資料10 各部会の発表の様子（1学期末）

(3) 具体的な実践事例（授業部会）

各教科等の指導では、自尊感情を高めるという視点で、各教科等の日々の授業を充実させていくことを大切にする。そして、学習を通して、「できた」「分かった」と実感をもたせたり、教師や友達に「認めてもらった」、「友達に教えることができた」と、

友達と学ぶよさを感じさせたりする。そのために、
①友達と関わりながら学ぶ学習形態や学習方法の工夫、**②主体的に取り組める教材・教具の工夫**、**③学習の成果を自ら実感できる評価の工夫**、**④規範意識を育む学習規律**、を教師の共通認識のもとに行う。
 そして各教科の授業で、**小グループで話し合わせる活動を多く取り入れて、よさっぴタイムで学んだ話し合う方法や、スキルを発揮しやすくする場面を設定する。**この活動を、「よさっぴトーク」と名付け、全校で共通理解して使用することにする。

理科ではLED豆電球を使い、電流と電圧の学習について実践を行った。LEDの方が明るいことから、より大きな電圧がかかっていると考えた生徒もいれば、並列回路の特徴から電圧は等しいと主張するなど、**よさっぴトークの時間では、生徒達同士でこれまでの学習をもとに、考えを練り上げていった。**
 (資料 11)



資料 11 理科の授業でのよさっぴトークの様子

7 研究の実証

(1) 生徒の自尊感情におけるアンケート調査の結果および考察

① 調査目的

生徒の自尊感情の実態調査と、よさっぴタイムに関する意識や授業や行事などの学校生活への意欲的な取組についての意識調査を行い、その相関を分析する。さらに、2学期にも同様の調査を行い、よさっぴタイムを中心とした学校カリキュラムの影響を分析する。

② 調査時期

- 第1回調査：2014年4月28日（758名分）
- 第2回調査：2014年9月29日（750名分）

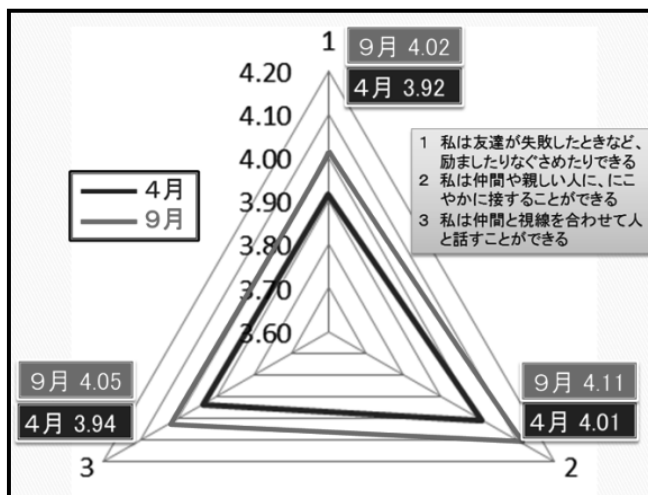
③ 調査内容・方法

生徒に対して、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」（平成23年）を参考に、自尊感情に関する22項目（資料12）を設定し、質問紙法により調査を行った。さらに、学校生活に関する6項目と、よさっぴタイムに関する13項目についても同様に行った。調査は、5件法で実施し、回収したアンケート調査の分析には、SPSSを使用した。

項目	とても おもしろい	おもしろい
私は今の自分に満足している	5	4
私は人の意見を素直に聞くことができる	5	4
私は自分が正しいと思うことは主張できる	5	4
私は自分のことが好きである	5	4
私は自分の中には様々な可能性がある	5	4
私は仲間を遊びに誘うことができる	5	4

資料 12 自尊感情に関するアンケート用紙

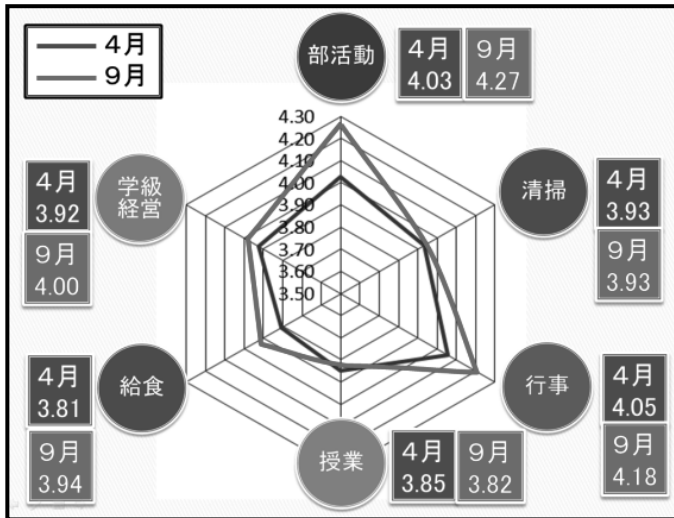
結果は、「仲間や親しい人に、にこやかに接することができる」や「仲間と視線を合わせて人と話すことができる」といった項目で、4月に比べ9月の方が、アンケート結果の平均値が上昇した。これは、よさっぴタイムにより「対人関係のコツ・技術」が向上したためと分析できよう。(資料 13)



資料 13 自尊感情に関するアンケート結果 (一部抜粋)

また、学校生活の意識調査（資料14）においても、「部活動・行事・学級活動」について、意欲的な姿へ変容していることが明らかになった。(資料15) これは、よさっぴタイムで身につけた対人関係のコ

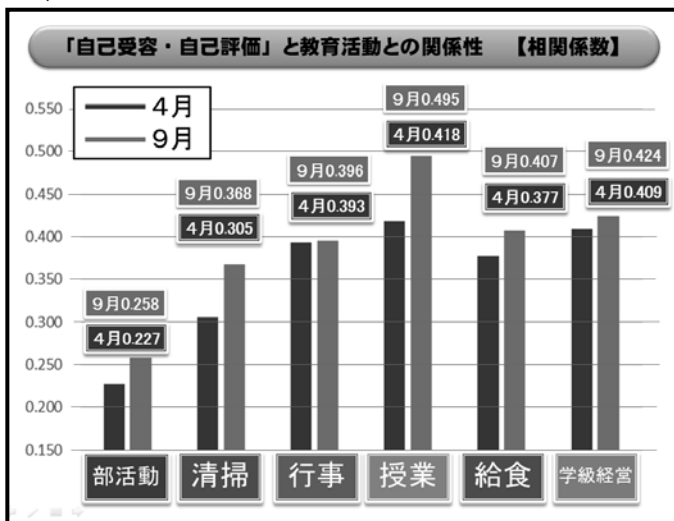
ツ・技術を発揮できる場面を、学校生活の中で、意図的・計画的・組織的に設定したのが有効であったといえよう。



資料 15 学校生活に関するアンケート結果

そして、アンケート結果を因子分析し、得られた因子について相関分析を行った。

その結果、4月より9月の方が、「自己受容・自己評価」と「部活動」「清掃」「授業」「給食」「学級活動」の相関係数が高くなった。このことから、よさっぱりタイムを中心とした学校教育活動の取組により、自尊感情が高まり、生徒はよりよい自己実現を目指して主体的に取り組んでいると分析できよう。(資料 16)



資料 16 「自己受容・自己評価」と各教育活動との相関係数の比較

(2) 教師の資質向上に関する調査の結果および考察

① 概念化シートとKJ法による分析

ア 分析対象

○日時 平成26年6月19日(木)

○場所 刈谷市立依佐美中学校 第3理科室

○単元 どうなっているの?運動の規則性

イ 分析の目的

1つめは、「教材・教具の工夫」が、主体性の成長につながったか検証するためである。本実践では、垂直落下と水平投射の仕組みを使った自作のオリジナル教具を用いている。この教具を用いて、生徒が水平投射される物体と自由落下する物体の関係について、意欲的に追究する姿が現れるか検証をする。2つめは、本実践は“よさっぱりタイムで身につけた力を授業にいかす”場面が設定されており、本研究の典型事例である。そこで、この授業を行う授業者の意識変容を分析することで、カリキュラムマネジメントへの取組が教師の資質向上につながったのか検証するためである。

ウ 分析方法

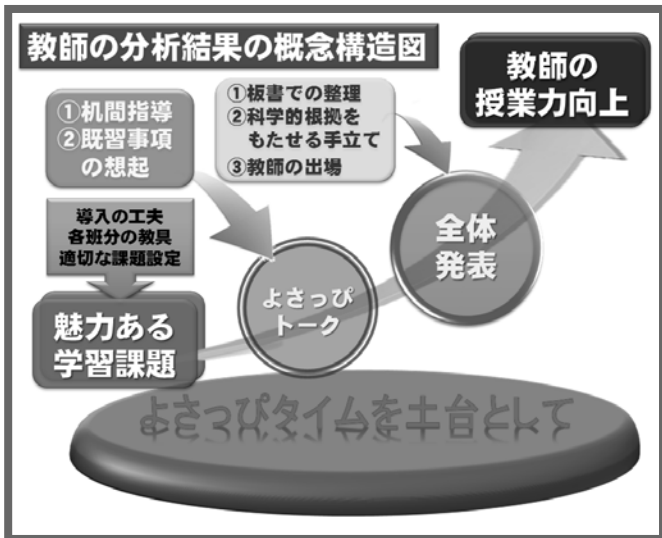
授業後に参観者を4つのグループに分け、概念化シートとKJ法を用いて分析をする。横軸には、教師と生徒について考える視点を位置付ける。縦軸には、プラス面とマイナス面を位置付けて分析をする。

エ 分析結果

生徒を惹きつける魅力ある自作の教材・教具を、各班に1つずつ用意したので、何度も繰り返し実験に取り組む意欲的な態度を生徒に養うことができた。(資料 17)しかし、全体発表の場面で、科学的根拠のある意見にするために、切り返しによって生徒の発表を深めたり、板書によって生徒の意見を整理したりするために、教師の役割や出場所に課題があることが見つかった。(資料 18)



資料 17 授業の様子



資料 18 教師の分析結果の概念構造図

② テキストマイニングによる分析

ア 分析目的

よさっぴタイムを中心としたカリキュラムマネジメントの実践において、教職員の意識の統一に関して有効であったと考えられる要因について明らかにする。

イ 調査時期 2014年12月20日～2015年1月8日

ウ 分析方法

自由記述式のアンケート調査を行い、Word Miner1.1を活用して分析を行う。

エ 分析対象

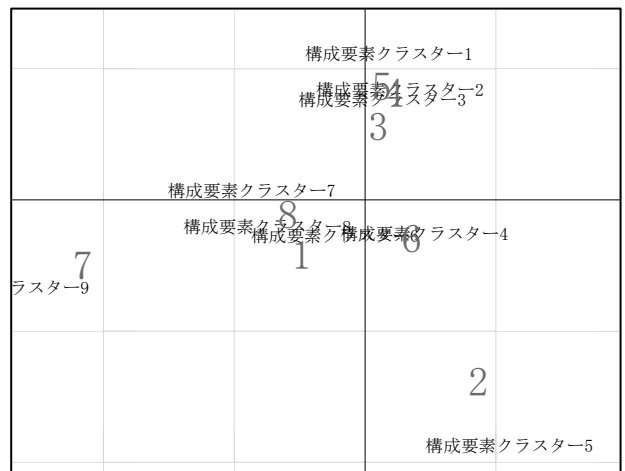
回答が得られた39人分のデータを対象とする。

オ 分析結果

今回得られたテキストデータを「1：協働性」「2：継続」「3：研究内容の明確化」「4：研修体制」「5：組織構造」「6：よさっぴタイムの有効性」「7：リーダーシップ」「8：組織・学校文化」に分類した。この分類には、調査者の主観が入るわけではあるが、テキストデータを数量化し軽量化して分析することで、単に被験者の言葉を主観的に捉えるよりも信頼性を少しでも高めるために、分析を行った。結果は以下の通りである。(資料19・20)

Cluster 6	Cluster 7	Cluster 8	Cluster 9
みんな	研究主任	ひとり	リーダー
教科	説明	チーム	リーダーシップ
研究	先生	チームワーク	校長
子ども	全職員	意見	信頼
自分	勉強	一枚岩	
授業	良さ	学校	
先生方	力	実能	

資料 19 Word Miner によるクラスター化



資料 20 Word Miner による分析結果

カ 分析結果

分析の結果から、よさっぴタイムの有効性を、教師は実感しているといえる。そして、よさっぴタイムを中心としたカリキュラムマネジメントを実施したことにより、研究や各教科の授業に対し、チームワークの良い前向きに取り組む教師の協働性の向上と、協力体制のある組織文化をさらに醸成することができた。そして、カリキュラムマネジメントを達成するためには、

- ①研究内容を明確化し、全職員に共通理解をする
- ②全員参加の組織構造
- ③研究の内容を継続するための日課や時間割のマネジメント
- ④参加型ワークショップを取り入れた研修会の定期的開催
- ⑤校長や研究主任を中心としたリーダーシップ

が重要であると分析できよう。

【主な引用・参考文献】

- 倉本哲男代表著書 『Lesson Study and Curriculum Management in Japan』 ふうろう出版 2014
- 倉本哲男 『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究：サービスマネジメント (Service-Learning) の視点から』 ふうろう出版 2008
- 田村知子 『実践・カリキュラムマネジメント』 ぎょうせい 2011
- 高野桂一 『教育課程経営の理論と実際 ―新教育課程基準をふまえて―』 教育開発研究所 1989
- 中留武昭・田村知子 『カリキュラムマネジメントが学校を変える』 学事出版 2004
- 中留武昭 『カリキュラムマネジメントの定着過程』 教育開発研究所 2005
- 曾山和彦 『子どもに学んだ「王道」ステップ ワン・ツー・スリー』 文溪堂 2014
- 國分康孝・片野智治 『構成的グループ・エンカウンターの原理と進め方』 誠信書房 2001
- デニス・ローレンス著 小林芳郎訳 『教室で自尊感情を高める』 田研出版 2008
- 小林正幸 『先生のためのやさしいソーシャル教育』 ほんの森出版 2005
- 『自尊感情や自己肯定感に関する研究』 東京都教職員研修センター紀要 2008-2012
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 『セルフ・エスティームの心理学』 ナカニシヤ出版
- A. W. ポープ代表著書 高山巖 監訳 『自尊心の発達と認知行動療法 ―子どもの自信・自立・自主性をたかめる―』 岩崎学術出版 1992